

平成21年 5月29日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520024

研究課題名（和文） 満足する理性。カント実践哲学への感情論的アプローチ

研究課題名（英文） Reason in self-content: Kant's practical philosophy and emotions.

研究代表者

竹山 重光 (TAKEYAMA SHIGEMITSU)

和歌山県立医科大学・医学部・准教授

研究者番号：60254520

研究成果の概要：

カントが『実践理性批判』で語っている「自己満足」という感情に着目し、『実践理性批判』以外の諸著作をも検討、さらには現代の哲学的感情研究をも参照して、この感情の存在・意義を明らかにした。カントの実践哲学は峻厳なものであるが、同時に、きわめて人間的であり、人間の有限性を厳しく自覚したものである。「自己満足」概念の検討はこの点をはっきりと示してくれる。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	700,000	0	700,000
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	2,900,000	450,000	3,350,000

研究分野：哲学、倫理学。

科研費の分科・細目：哲学・哲学倫理学

キーワード：カント実践哲学、感情、自己満足、現実的行為

1. 研究開始当初の背景

カント実践哲学は、一般には、感情に対して否定的であり、感情はそこに占めるべき位置をもたないと考えられがちである。しかし、これはたとえば『判断力批判』を思い浮かべればただちに明らかな謬見であり、あらため

られなければならない。本研究が着目するのは、『実践理性批判』において語られる「自己満足」(Selbstzufriedenheit)という感情である。それは「徳」、「自由」、「幸福」といった実践哲学における重要概念とともに語られている。さらにそれは明確に、人間の現実的行為に着目しつつ語られている。

この感情を検討しその可能性を展開することで、一般に想定されているものとは異なった、けれどもカント的な、人間の行為像、ひいては人間像の提示を試みたい。

この感情を主題として取り扱った研究はまだほとんど存在しない。

2. 研究の目的

(1)「自己満足」という感情が『実践理性批判』において、そしてカント実践哲学の全体においてどのような位置を占めるのか、そしてどのような意義や展開の可能性をもつかを検討し、見極める。

(2)「感情」をそもそもどう捉えるべきであろうか。感情は非合理・主観的・非理性的とされがちであるが、これでは不適切である。近年、哲学、倫理学、心理学、脳科学において、感情に「志向性」、「認知性」、「合理性」を認める研究が盛んに行なわれている。現代のこうした感情研究を調査・検討し、カント実践哲学における感情をより十分に、現代的な観点からも捉え、位置づける。

(3)人間の行為の理由・動機をめぐってなされている哲学行為論の議論を参照・検討しつつ、「自己満足」という感情をカント的人間像、行為像に位置づける。

3. 研究の方法

(1)「自己満足」は『実践理性批判』において語られるのだが、カントの公刊著作ではその箇所以外にこの感情が語られることはない。この事実は、自己満足感情がそれほど注目されない理由のひとつであろう。しかしながら、カントの講義録や自筆遺稿では、実は頻繁に語られている。

そこで、「自己満足」および「満足」などについて、カントの著作のデータベースをも用いて、検索し、使用例を拾い上げ、文脈や意味合いを探り出す。

(2)こうした基礎的文献学的な作業を踏まえた上で、『実践理性批判』において語られている自己満足が、そもそもどういう文脈で語られ、考察されているのか、議論の流れのなかでそれをどう位置づけるのがふさわしいのかを、先行研究も参照しつつ確認してい

く。

(3)英語圏において盛んに、さらには少し遅れてドイツ語圏においてもなされている、現在の哲学的感情研究の文献をひろく渉猟して、感情概念そのものの捉え直しを行ない、カントの自己満足概念と批判的な突合せを試みる。

4. 研究成果

(1)自己満足という感情は公刊著作では一度しか語られない。しかし、講義録や手書き遺稿を考慮に入れるならば、カントは長期間にわたってこれを思索と検討の俎上にあげていると言える。しかも、むしろいわゆる「批判期」において、これを何度も繰り返し考察していると言える。

これはカント研究においてこれまで気づかれていなかった事実と言ってよい。

(2)それら諸考察において自己満足は、乏しき(*bedürftig*)存在者である人間と神的存在者との対比もしくは類比関係において検討されている。そして、前者が抱きうる「自己充足」(*beatitudo*)に相当する、人間に独特の感情として考えられている。

また、自己満足は、カントに直接先行するドイツの当時の思潮に先例をもっていない、つまりカント独自の概念である可能性がある。

同時にしかし、自己満足は、かなり親近性の高い概念を、スピノザの感情論において有している。それは、*Acquiescentia in semet ipso* という概念である。

(3)カントの実践哲学は、とりわけ『基礎づけ』以降、純粋性(*Reinheit, Reinigkeit*)の要求が表立ってくる。しかし、これによって感情の占めうる位置がそこから奪われたわけではない。「行為判定」(*Beurteilung der Handlung*)の側面ではなく「行為実行」(*Ausübung der Handlung*)の側面において、感情は明確にその位置をあたえられている。またこのことは、むしろ批判期に明白である。

これはカント実践哲学理解にとって重要な点である。カントの実践哲学が完成形態に到達するために越えなければならなかった難関、カント自身が「賢者の石」と述べている事柄である。だが、これまでそれほど注目されてこなかった。

(4)カント実践哲学で行為実行の側面において表立ってくるのは、言うまでもなく駆動源(Triebfeder)としての「尊敬」(Achtung)の感情である。つまりこれは、人間の現実的行為実行には、感情が必然的に構成素として含まれるということである。自己満足という感情も、この、人間の現実的行為実行の側面における構成素として考えられていると思われる。

(5)カントが『実践理性批判』で自己満足を語る文脈は、実践理性の弁証論を批判的に解消する箇所である。すなわちそれは、「最高善」を、「徳」と「幸福」とを検討する文脈である。

したがって、自己満足は、道徳性を成立させる意志規定の順序を論じる文脈にあるのではない。それは道徳的な行為がこの世界において実行され、道徳的な行為がこの「世界のなりゆき」(Weltlauf)と交差する場面を論じる文脈にある。この点で、自己満足と尊敬とは議論の文脈が異なるのである。自己満足は、道徳的に行為する人間に、行為する現在において訪れる、特殊な感情である。カント自身それを「知性的感情」としている。また、それは尊敬とはちがって駆動源ではない。

さらに、自己満足を幸福と同一視してはならない。『実践理性批判』においては、そしておそらくカント実践哲学全般において、幸福は感性的なもの経験的なものであり、これと自己満足の感情とは区別されなければならない。両者の同一視もしくは混同は、すでに若干の研究者による指摘もなされているが、カント実践哲学理解において繰り返しあらわれてきた、誤解である。

(6)人間の現実的な行為実行と世界のなりゆきとの関係について、カントは、30歳代の著作である『フンク早世』からのちの『宗教論』などにいたるまで、基本的に考え方を変えていない。すなわち、道徳的な行為であれそれ以外の種類の行為であれ、たとえそれがどれほどの熟練をもってなされようと、結末は「世界のなりゆきが招き寄せる」。これは、Freiheitgesetz と Naturgesetze というカントの根本的区別からの帰結でもある。このことから人間に訪れる、普遍的感情が、『フンク早世』で語られる「穏やかな憂鬱」(die sanfte Schwermut)である。これは現象学的感情研究でいう「気分」に相当するものである。

したがって、カントにおける自己満足の感情は、穏やかな憂鬱という気分浸されつつ行為する人間に、人間がそうであるにもかか

わらず訪れうる、快の感情だと言うことができる。

(7)「感情」が非合理・主観的・非理性的なものであるとする考え方、いわゆる「フィーリング説」(feeling-theory, feeling-centered conception)は、決して自明のものではない。それは実は、中世思想からの訣別を意識的に行なった、デカルトをはじめとする初期近世思想の産物である。

現在の感情研究で提起されている、感情の志向性、認知的性格、合理的性格は、研究がまだ発展・展開段階にあるとはいえ、十分に説得力をもつものである。

(8)現代の哲学的感情研究には大きな問題点がある。それは、英語圏における感情研究が、歴史的連関・文脈にかなり無頓着なことである。これにくらべ、ドイツ語圏における感情研究は、現象学的な感情研究の遺産もあるせいか、歴史的連関・文脈に自覚的である。このことは、現代日本において哲学的感情研究をなそうとするものにとっても示唆的である。

すなわち、ただたんに現在盛んに行なわれている研究分野であるからそれを行なうのではなく、哲学にとって、そして現在を生きる自己自身にとって、なぜ感情が問題としてあらわれてくるのかを自覚的に反省するべく示唆してくれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[その他]

冊子

『満足する理性。カント実践哲学への感情論的アプローチ』

著者 竹山重光

2009年4月

全221ページ

(研究成果報告書作成要領の変更が通知される前から、旧来の成果報告書冊子を念頭に置いて執筆されていた原稿をとりまとめたもの。この事情のゆえ、作成に要する費用は私費によって賄われた)

6. 研究組織
(1) 研究代表者

竹山 重光 (TAKEYAMA SHIGEMITSU)
和歌山県立医科大学・医学部・准教授
研究者番号：6 0 2 5 4 5 2 0

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者